

地域性を取り入れた図工授業の実践—題材「ようこそ、わたしたちのまちへ」を通して—
蝦名敦子

本考察は、「小学校の特性を活用した図工科学習モデルの構築」研究の一環で、2011年度に小学校4年生に実施した題材「ようこそ、わたしたちのまちへ」をとりあげた。そしてどのように地域性を題材に取り入れるに至ったのか、その経緯を示すとともに、子どもたちのワークシートも検討しながら、本題材がいかなる発展性を示して現在に至っているかについて言及した。

考察のプロセスとしては、1. 題材「ようこそ、わたしたちのまちへ」について 2. 子どもたちのワークシート分析 3. 本題材の展開と広がりについて 4. 題材と地域性、について論及し、最後に本題材の特質を抽出しながら、教科の枠を越えてできる図工科教材の可能性について考察した。

本題材を通して子どもたちが最終的に選んだ6体の灯籠の絵は、1) 桜と弘前ねぶた、2) リンゴと長勝寺、3) 誓願寺と長勝寺、4) 弘前城と弘前教会、5) 秋の岩木山と夕焼けの岩木山、6) 旧市立図書館の正面と裏、である。実際の場所と対比させてみると、子どもの大胆な線描と色づかいが明瞭である。子どもたちの絵が墨描きで非常に興味深いのは、場所の説明ではなく、正確さよりも形の特徴が大胆に捉えられている点にある。また色づかいも実際の建物の色とは違って、夜でも電球の光で映えるように原色の色を選んで鮮やかに彩色している。筆の一回性が非常に難しいと思われる筆墨を使いこなしており、小学校4年生という時期の子どもでなければ表現できないねぶた絵が完成した。

一見、子どもたちの絵は一気に描いたようにも見えるのであるが、途中の段階で記した全てのワークシートを精査すると、毎回、子どもたちは工夫した所や頑張った点、また次に生かしたい事柄、他の作品の良いと思われる点などについて振り返っており、それらの気づきや反省を通して形や色、蠟の扱い方など一つひとつ工夫しながら制作していったことがわかる。その過程において鑑賞だけではなく、慎重に作業を確認し合いながら進められていて、形や色の組合せについて具体的な検討がなされていた。つまり、中学年に特徴的な「計画を立てる」、「材料や用具の特徴を生かして使う」、「製作の過程」、「よさや面白さを感じ取る」、「組合せ」などのキーワードと照合してみても、「表現」・「鑑賞」領域、[共通事項]と内容が充足されており、また中学年(4年生)の教材として適正であったことが十分認められる。

この題材によるねぶたの特徴は、子どもが観客に紹介したい弘前の名所を自ら選んで、描いている点にある。蠟描きしていることから、日中だけではなく、夜に電気の光で見ることによって初めて作品の効果が発揮され、実際のねぶた祭りへの参加と直結していった。ねぶたの扇形も、子どもたちが算数の授業で使用する大型分度器を活用するというアイデアで生まれ、自分たちで発見したフォルムである。学校の教材から始まって試行錯誤しながら子どもたちが自ら作り上げていった点に、本題材の最も大きな特色がある。

昨年実施されたこの題材は絵の制作が中心であったが、今年の新4年生がねふたの骨組みから作りたい、と新たな興味・関心を示してくれたことから、本題材は工作に重点を置いた教材として今年度にも継続されている。校外学習や他教科、郷土の祭りにもリンクさせたことにより、もともと持つねふた祭りの造形的内容が、学校教材としても密接に関連し合い、本題材は図工教科の枠を越えて広がりのある教材として発展している。

郷土のねふた祭りが観光化されていく一方で、担い手が減少し形式化された祭りの在り方が危ぶまれていることも考え合わせれば、題材のねらいを教科の目的に合致させることにより展開できるこのような授業実践は、校外学習や祭りで地域性とリンクさせた広がりをもつ地域特有の学校教材として、新たな一例を示していると言えるのではないだろうか。大人の専門家による指導からではなく、授業の中から子どもの発想で生まれた子どもの絵であること—この点が小さな一歩であるが、これまでに見られないねふた(灯籠)の新たな表現として、子どもねふたのスタイルにも貴重な提言となり得ているのではないかと思う。

